

WeChat を有効活用した長崎短期大学の中国語教育及び地域活動¹⁾

Effective Chinese Language Teaching and Community Activities at Nagasaki Junior College via WeChat

青木 萌

要旨：

本稿は長崎短期大学（地域共生学科国際コミュニケーションコース）における中国語教育および地域活動について述べたものである。現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、対面授業や海外留学が計画通りに行えず、中国語が学びにくい環境にあるが、2020年度に入学した学生に対して WeChat を活用した教育を行なった結果、HSK5級の合格者が歴代最高となった。また、1年生が受験した HSK3級についても、2020年度と2021年度のいずれも好成績を収めることができた。更に、新型コロナウイルスの影響によって、地域活動も行いにくい状況にあるが、中国語での動画作成を通じて、充実した地域活動を行うこともできた。その際、WeChat を有効的に活用することができた。従って、WeChat の活用は極めて効果的であることを主張した。

第一節では、本学の中国語教育と地域活動について紹介した。その後の第二節では、WeChat を用いた中国語教育について詳述した。第三節においては、実際のデータを基に、WeChat による中国語教育と地域活動の成果について述べた。そして最後の第四節では本稿の総括を行なった。

Abstract：

This paper discusses Chinese language teaching and community activities at Nagasaki Junior College via WeChat. The COVID-1 pandemic has not only shifted some face-to-face classes to online classes, but also completely blocked students' study-abroad plans. However, the effective use of WeChat could help greatly improve students' Chinese language skills.

キーワード：中国語教育、HSK、地域活動、WeChat、長崎短期大学

Keywords：Chinese Language Teaching, HSK, Community Activities, WeChat, Nagasaki Junior College

1. 長崎短期大学の中国語教育及び地域活動

本稿は中国語教育と地域活動について述べたものである。現在、筆者は長崎短期大学地域共生学科の国際コミュニケーションコースで主に中国語と地域活動に関する授業を担当している。中でも、「中国語の検定試験である HSK（筆記）対策の指導」、「中国留学のサポート」、「中国語をいかした地域活動」、この三つに対して特に心血を注いできた。HSK は1級から6級まであり、6級が最高級である。筆者の授業では「質と同時に量を意識する」、「常に変化のある授業」、「様々な方法での反復練習」、「研究に基づいた的確な解説」、「学生の長所を見つけて伸ばす」、「学生とのコミュニケーション」この六つを大切にしている。その結果、どのような学生（合理的配慮を要する学生、学びに不安を抱えている学生、4年制大学の編入を目指して入学してきた学生）であっても、筆者が2年間指導した学生は全員が HSK4級に合格し、クラスの約半分の学生が5級に合格している。2018年4月に筆者は本学に着任したが、その後の2022年3月までの約4年間で合計167名の HSK 合格者を育成することができた（6級1名、5級17名、4級39名、3級56名、2級34名、1級20名）。筆者の中国語のクラスは平均10名前後であるため、一人の学生が2年間で数回受験をしているのである。これほど

HSKの受験者が多いのは、本学でHSKの団体受験を実施していることも大きく関係していると言える。しかも団体受験はほぼ毎月行うことができ、一人からでも受験が可能である。従って、学生は常に明確な目標を持ちながら、学びを継続させることができていると感じている。

まず、本学の中国語の科目を紹介しておこう。以下の表を見られたい。

表1 本学の中国語科目（2022年現在）

科目名	学年
中国語基礎Ⅰ	1年生（1、2クォーター）
中国語基礎Ⅱ	1年生（1、2クォーター）
中国語基礎Ⅲ	1年生（1、2クォーター）
中国語ライティング&文法Ⅰ	1年生（3クォーター）
中国語会話Ⅰ	1年生（3クォーター）
中国語検定Ⅰ	2年生（5、6クォーター）
中国語検定Ⅱ	2年生（5、6クォーター）
中国語検定Ⅲ	2年生（5、6クォーター）
中国語ライティング&文法Ⅱ	2年生（7、8クォーター）
中国語会話Ⅱ	2年生（7、8クォーター）
中国語アクティブラーニング	2年生（7、8クォーター）

クォーター制を採用し、1年間を4分割しているため、やや複雑だが、いずれの科目も合計15回行う（1コマ90分）。簡単に各科目の内容を説明しよう。

1.1 1年生の中国語科目

まず、「中国語基礎Ⅰ」、「中国語基礎Ⅱ」、「中国語基礎Ⅲ」はいずれも1年生が入学してすぐに履修できる中国語の科目である。4月から8月まで行い、中国語の基礎固めを行う。だが、短期大学は2年間と学びが限られているため、HSK対策も同時に意識しながら指導を行う。従って、この「中国語基礎Ⅰ」、「中国語基礎Ⅱ」、「中国語基礎Ⅲ」が終わる8月頃には、ほぼ休まず授業に出席した学生であれば、HSK2級に合格できるレベルとなっている。

そして、9月になり後期の授業が始まると、中国語は「中国語ライティング&文法Ⅰ」と「中国語会話Ⅰ」の二つを受講することができる。それぞれ週二回行われる。前者の授業では主にHSK3級の読解と作文対策を行い、後者の授業においてはリスニングを行いながら、会話の練習も積極的に取り組む。この二つを真面目に受講した学生は基本的に全員が2年生になるまでに3級を取ることができる。なお、この二つの授業は11月末で終了となる。これで1年生の授業は終わりである。上の表を見ると、1年生の4クォーター（12月から2月）に中国語の授業が一つもないことに気づく。これは何故かと言うと、この期間は授業の一環として基本的に数ヶ月の国内インターンシップ或いは海外留学（中国、カナダ、韓国）を行うため、学校での授業は開講されないのである²⁾。そのため、1年生の中国語の授業は4月から11月末までのため、中国語の学習期間は極めて限られていると言える。

1.2 2年生の中国語科目

次に、2年生の中国語について説明しよう。4月から8月の間は「中国語検定Ⅰ」、「中国語検定Ⅱ」、「中国語検定Ⅲ」を受けることができる。HSK4級の聞き取り、読解、作文を意識しながら、指導を行なっている。課題を真面目に取り組み、授業にも休まず出席している学生は2年生の8月頃にHSK4級の合格が可能である。

9月末から翌年2月の期間においては、「中国語ライティング&文法Ⅱ」、「中国語会話Ⅱ」、「中国語ア

クティブラーニング」の3科目が設置されている。まず、「中国語ライティング & グラマーⅡ」では、HSK5級の読解と作文の対策を行う。次に、「中国語会話Ⅱ」では、会話練習をしながら、同時に、HSK5級の聞き取り対策も行う。そして、「中国語アクティブラーニング」の授業においては、中国語を用いて動画を作成したり、地域活動に関連した学びを行なっている。そして、2年生の2月頃までにクラスのほぼ全員がHSK5級に挑戦する。

さて、今度は本学の中国語に関する留学および交流について述べる。

1.3 留学および交流

筆者が現在の勤務校に着任後、新たに六つの大学と交流を深めるに至った（上海師範大学〔3年次編入、短期留学〕、浙江理工大学〔学術交流協定締結、交換留学、短期留学〕、黄山学院〔学術交流協定締結、3年次編入、交換留学、短期留学〕、唐山学院〔オンライン交流〕、大葉大学〔学術交流協定締結、交換留学、短期留学〕、大仁科技大学〔学術交流協定締結、交換留学、短期留学〕）。上記の大学には、親しい友人が勤務しており、また、筆者の妻は中国国籍であるため、これらに伴う人脈をいかしている。これまでの経験をいかし、今後も交流を更に深めていく予定である。

最後に地域活動に関する中国語の学びも紹介しておこう。

1.4 地域活動における中国語学習

本学では地域をフィールドにした協働型の学びを行なっている。筆者はこれに関する授業を毎年担当している。2022年度の時点で地域活動の科目として中心的なものは「Awesome Sasebo!Ⅰ」、「Awesome SaseboⅡ」、「Awesome Sasebo!Ⅲ」、「Awesome Sasebo!Ⅳ」がある。また、「地域と人々」、「異文化理解演習」、「サービスラーニング」、「茶道文化Ⅰ」、「茶道文化Ⅱ」、「茶道文化Ⅲ」、「茶道文化Ⅳ」等の科目においても地域活動を積極的に行なっており、筆者は2018年に着任後、中国語だけでなく、上記の科目も全て担当している。本学は佐世保市にあるため、佐世保市の活性化について考え、佐世保市の魅力を国内外に発信することを主な目的とし、町内会や商店街の組合と積極的に連携し、様々なイベントやボランティアに参加しながら地域の方々との交流をしている。筆者は特に中国語をいかした地域活動を展開し、履修者は本学で学んでいる中国語を最大限にいかして、飲食店や観光地の案内板の翻訳、クルーズ船観光客に対する通訳、佐世保や学校のPR動画の作成などを行なっている。このような地域活動は、地域貢献や地域への理解が深まるのと同時に、学生の実践的な中国語力を養うことも可能となり、極めて貴重な学びであると感じている。

以上が本学の二年間の中国語およびそれに伴った地域活動に関する学びである。さて、次は、筆者の中国語の授業における目標について説明する。

1.5 中国語の授業における目標

現在、筆者の中国語の授業では卒業までにHSK5級に合格（180点以上）することを目標としている。主な理由としては、以下の通りである。

- (1) ① 2018年に筆者が長崎短期大学に着任し、4年間中国語を指導したが、筆者が2年間指導した学生は全員がHSK4級に合格し、更に上の5級を目標にする必要性を感じているため。
- ② 筆者が着任した2018年度以降、毎年、中国留学の希望者が増加し続けており、上海師範大学の対外漢語学院への3年次編入が最も人気である。だが、そのためには、HSK5級の合格が入学条件の一つになっているため。

しかしながら、本学は短期大学のため、2年間という極めて限られた中で中国語を学ぶ。また、本学の中国語の科目は全て選択授業であり、上で既に見たように、平均週に3コマである。更に、前述の如く、1年生の中国語は3クォーター（11月末）で終了してしまう。加えて、HSK公式ホームページによると、HSK5級について次のように述べている。

(2) 受験生の日常中国語の応用能力を判定するテストです。「中国語の新聞や雑誌が読めるだけでなく、中国の映画やテレビも観賞でき、さらに、中国語でスピーチすることができる」ことが求められます

そして、HSK5級の学習目安は、

(3) 主に週2～4回の授業を2年間以上習い、2,500語程度の常用単語を習得している者を対象としていますとなっている。なお、HSK公式ホームページに基づく、HSK5級の一つ下の級である4級の学習目安は次の通りである。

(4) 大学の第二外国語における第二年度後期履修程度の学習が目安

つまり、4級であっても、2年間の学習を要するのである。従って、本学の学生にとってHSK5級は極めて難関であると言わざるを得ない。更に追い打ちをかけるかの如く、近年においては、周知の通り、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）（以下コロナウイルスと称することにする）が流行し、各教育機関に及んだ影響は甚大である。本学においても例外ではない。筆者にとっての最も大きな影響としては次の三つである。

(5) ①対面授業の代わりとして、オンライン授業をせざるを得ない時期があった

②中国へ留学できなくなった

③地域活動に制限が生じた

特に、2020年の4月に入学した学生は上記の三つを直接被った。入学後、オンライン授業からスタートし、通常であれば、1年次の後期で行える3ヵ月の語学留学や2年次に休学して行える1年間の交換留学等は一切実現せず、2年生の最後の学期においては、再びコロナウイルスの影響でオンライン授業が増えた。地域活動や中国に関するイベントもほぼ無くなってしまった。遺憾なことに、2020年度の学生はオンラインで始まりオンラインで終わることとなったのである。

2020年度の新学期が迫り来る2019年度の春休みに筆者はコロナウイルスの状況と本学の限られた中国語のカリキュラムを見て、一種の危機感を覚えた。これまで行なってきた中国語教育を改めて徹底的に振り返る必要性を強く感じたのである。その結果、2020年度からは、授業方法を更に工夫する努力をしながら、同時に、以下の四つを更に意識して指導することを決意するに至った。

(6) ①学生の学習意欲を更に高める工夫

②HSK対策の更なる強化

③授業以外の時間における個別指導の徹底

④コロナ禍でも行える地域活動の模索

コロナ禍でこれらを実行するにはどのような方法が適切であろうか。様々な方法を探求した結果、筆者はある一つの教育方法の導入を試みる考えが芽生えた。それは即ち、WeChatの活用である。WeChatは日本で使用者の多いLINEと類似した機能を有するインスタントメッセージングアプリである。中国においては、LINEではなく、このWeChatが広く用いられている。このWeChatを中国語教育の際に有効的に活用することで、大きな教育効果を得られるのではないかと思うに至ったのである。実は、WeChatは2019年度から幾つかの中国語の科目に対して実験的に活用し始め、効果を実感することがあったが、授業で重点的に用いるようになったのは2020年度からである。

従って、以下、WeChatによる中国語教育の方法とその効果について述べることにしたい。WeChatを用いた中国語教育については、例えば、Xiaoqin Huang2019、謝金良2021、日本語教育においては譚笑2017、植松2020、劉琳2021等、複数存在するが、管見の及ぶ限りでは、短期大学の中国語教育におけるWeChatの教育効果について詳述したものは見当たらないため、今回、本稿で敢えて論じてみたい。なお、4年制大学で第二外国語として中国語を学ぶ大学生も学習期間が短い場合が多いので、本稿の内容が参考になる可能性がある。本稿が中国語教育、更には地域活動を行われる方々にとって少しでも役立つ情報となれば幸いである。

2. WeChatを活用した中国語教育

筆者の中国語の指導は、学生一人一人に合わせた個別指導を極めて大切にしている。例えば、HSK対策を指

導する際、学生の性格や長所、更には、アルバイトを含めた生活状況等によって、指導方法を変えるようにしている。正にオーダメイド的な感覚で、柔軟かつ的確な指導を心がけている。それ故、授業以外の時間においても、質問のある学生に対しては、個別指導を徹底して行なっている。通常、個別指導と言うと、授業終了後、教室に残って行かうか、あるいは、研究室で時間を指定して対応し、ある程度時間が限られていることが想像できるであろう。だが、WeChat を活用することで、時間と場所を選ばず、効果的な指導が可能となる。既述の如く、WeChat は LINE と似たような機能を有するので、メッセージだけでなく、写真やボイスメッセージの送信、更には、電話やテレビ電話等を利用することができる。そのため、これらの機能を利用して、中国語の指導を効果的に行うことができるのである。また、普段、学生が日常的に多用している LINE ではなく、WeChat を使用することで、「中国語専用の勉強ツール」と言ったような意識が高まる点も、中国語学習にとって効果的である。

筆者は 2020 年度からは WeChat を用いて、主に以下の二点を大切にしながら指導を行うことにした。

(7) ①ボイスメッセージと写真送信の有効活用

②グループの有効活用

以下、順番に述べる。まず、①のボイスメッセージと写真送信の有効活用について説明しよう。

2.1 ボイスメッセージと写真送信の有効活用

筆者の授業では、毎回宿題として音読の提出を求めている。授業で学んだ所を音読し、WeChat のボイスメッセージで提出するのである。学生が提出した音声はすぐに確認できるので、学校外においても容易に指導を行うことができる。しかも、教員もボイスメッセージでアドバイスをを行い、お手本の音声を再度送り、学生に聞かせることも可能である。そのため、宿題を一度提出したが、上手く発音できなかった学生に対しては、教員が丁寧にアドバイスをを行い、学生はそのアドバイスを基に練習し、再提出を行う。これによって、学生の発音を確実に向上させることができる。しかも、このようにして教員と学生がやり取りを行うことで、一種の信頼感が生じ、学生の学習意欲の向上も期待できる。そして何と云っても、対面形式を必要としないため、コロナウィルスを全く気にせずに行えるのは大きな強みである。

また、既に良く知られているように、発音が上手になると、リスニング力も上がるため、このような発音指導は、HSK のリスニング対策に対しても効果的な指導方法であると言える。なお、熱心な学生に至っては、宿題とは別に、自習時に音読した音声を定期的に提出し、発音指導を求めてくることがある。学生のレベルや学習意欲に合わせて指導を的確に調整できるため、このボイスメッセージ機能を用いた指導はとても有効的であると感じている。

以上、ボイスメッセージの利点について述べたが、その利点は発音指導だけに止まらない。ボイスメッセージを用いて、HSK の問題に対して詳しく解説することもできる。特に、効果的だと感じたのは、作文のセクションにおける指導である。作文のセクションで出題される並び替え問題を詳細に解説し、何故そのような語順で文が形成されるのかを、ボイスメッセージで丁寧に指導することができる。状況に応じて、文字入力や写真を利用しながらのやり取りも可能である。作文の添削も容易に行える。学生は時間や場所を選ばず即座に提出や質問ができるため、普段の課題や HSK 対策だけでなく、長期休暇の自習時、あるいはオンライン授業時といった特殊な状況においても効果的に学ぶことができる。欠席をした学生に対するサポートにも便利である。

更に、上記以外に、WeChat を利用することによって、進路相談など、学生の様々な相談に対してもスムーズに行うことができる。学生にとっては、電話や対面での相談は時としてやや直接的に感じる場合があり、一方で、文字入力の場合は、適切な表現に悩んだり、短時間で一度に多くの情報を伝えるににくいことがあるため、ボイスメッセージによるやり取りは、正に中間的な存在、即ち「対面や電話」と「文字入力」の中間に位置し、とても便利である。

上述したボイスメッセージと写真送信の有効活用に関する要点を簡潔にまとめると、以下のようになる。

(8) ①時間や場所を問わず、発音指導や HSK 対策のサポートを効果的に行える

②教員と学生との間に信頼関係が生じ、学生の学習意欲の向上に繋がる

③学生相談などにも活用できる

さて、次は WeChat のグループ機能を活用した教育方法について述べる。

2.2 グループの有効活用

WeChat は通常、教員と学生が個別でやり取りを行うが、グループ機能を有効的に用いると、更に教育効果が高まることとなる。即ち、グループの中でメッセージ等を送ると、グループに登録されたメンバーは全員が受信し、様々な事を共有しやすくなるのである。グループは学年、あるいは、クラスごとに作り、授業や検定試験に関する情報を効果的に送ることができる。また、中国語や中国に関する面白い情報なども定期的に送信して共有することで、学生の学習意欲の向上に繋げることができる。コロナウィルスの影響により、中国へ行くことができない状況のため、このような中国に関する情報の提供は重要である。なお、個別指導、宿題提出、各種の重要な相談等はグループではなく、個別で対応を行う。やはりただ漠然と WeChat を使用するのではなく、WeChat 上の「個別」と「グループ」を有効的に使い分けることが大切である。

上記に加えて、グループを形成することによって、一種の一体感が生じ、クラスの雰囲気が更に良好になる、といった点もグループ作成の大きな利点として挙げられる。また、検定試験の受験者の増加にも貢献していると感じている。これはどういう事かと言うと、既述の如く、本学では HSK の団体受験を実施し、ほぼ毎月 HSK を受験することが可能である。そこで、HSK の受験申込の際に、グループ内で、受験希望者の確認として、学生のプライバシーに影響しない程度に受験希望者の名前または受験希望者数を表示する。これにより、一種の学生間の競争心を駆り立てる効果があると感じている。実際に、受験に悩んでいた学生が、多くの受験者がいることを知ったり、あるいは、親しい友人やライバル的な学生が受験を希望することを知り、それに負けじと受験を決意する、といった事が起こっている。加えて、このグループ形成をきっかけに、学生同士で励まし合う姿もよく見受けられる。更に、HSK や長期休暇の前後などには、グループで声かけを行い、学生の学習意欲の向上も図ることができる。

一方、状況に応じて、注意すべきことをグループで知らせ、直接的な指導をあえて避け、ワンクッションを意識した程よい距離感での注意を行うこともできる。検定試験や就職活動に対する励ましも、プレッシャーをさほど与えない程度に声かけできるので、適切に利用すると、とても効果的だと感じている。

なお、筆者はコロナウィルスが流行してからは、オンラインで中国の大学との交流会を定期的に行っているが、この交流会の終了後は、学生同士が WeChat を交換し、交流を継続するようにさせているため、この学生間の交流時に WeChat が極めて役立っている点も特筆すべき利点である。これは最も重要であると言える。なぜなら、中国の大学生は LINE を使用せず、基本的に全員が WeChat を日常的に使用しているからである。WeChat が使えることで、中国の大学生ともスムーズに交流が可能になるのである。

最後にもう一つ利点を挙げると、中国の大学へ留学した場合、WeChat を使って授業関連のやり取りを行うことが多いため、筆者の授業で事前に WeChat の使用に慣れておくことで、留学時にスムーズに WeChat を使いこなすことができると考えられる。また、卒業後も WeChat の存在は学生にとって有益である。これは 2019 年度から行っており、効果を実感している。グループを残しておくことで一種の「同窓会の窓口」的な優れた役割を果たすのである。仕事に関する朗報を共有したり、留学時のサポートをグループで効率よく行える。一方、仕事や留学で生じた問題の相談や進路変更等の相談は個別の WeChat で対応する。これらの点も筆者が WeChat を導入してから感じた利点である。従って、上で述べたグループ作成の要点は次のように総括することができる。

(9) ①一体感が生まれ、クラスの雰囲気がより良好になる

②学生同士で励まし合ったり、競い合うことにより、学習意欲が向上する

③留学時や中国の大学との交流時に重宝し、卒業後のサポートにも役立てられる

以上、筆者が 2020 年度から重点的に実施した WeChat の教育方法について詳述した。次節では、いよいよ

この教育方法の成果について発表する。

3. WeChat 導入後の教育成果および分析

3.1 HSK5 級の受験結果

上述のような WeChat による指導を導入したことによって、驚くべき成果を得るに至った。まず HSK5 級の結果を紹介する。以下の表を見られたい³⁾。

表2 HSK5 級に合格した学生数

2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度
0 名	1 名	3 名	6 名	8 名

2020 年度に入学し、筆者の中国語の科目を最後まで履修した学生は 11 名である。そのため、2020 年度に入学し、2 年生となった 2021 年度において、HSK5 級に 8 名が合格したことは特筆に値する。

なお、2021 年度の合格者数は 8 名だが、その中には、5 級に 2 回合格した学生も含まれている。5 級に 2 回合格した学生は 2 名である。2 度受験した理由としては、上海師範大学の 3 年次編入に必要な入学条件を確実に満たすため、1 回目の受験結果の公表を待たず、翌月に念のため 2 回目の受験をしたからである。5 級に 2 回合格したことは、学生の中国語能力が確かに 5 級に達していることを証明しているため、肯定的に評価することができる。よって、同一人物を除くと、6 名が 5 級に合格したことになるが、この中の 4 名は高等学校で中国語の学習歴を持つ学生である。だが、本学入学時には基礎がまだ固まっておらず、発音にもかなりの問題があったため、2 年間で 5 級に達したことはやはり高く評価できる。なお、6 名中 2 名は高等学校での中国語学習歴がなく、長崎短期大学に入学してから中国語を学び始めた。そのため、驚異的な成長である。しかもその内の 1 名は、正に上述した「2 度 5 級に合格した学生」の内の一人である。故に、WeChat による教育効果を強く実感している。

実は、更に驚くべきことがある。それは即ち、HSK5 級の合格者に対して、留学経験の有無を表示させると、以下ようになったことである。

表3 HSK5 級に合格した学生数（留学経験の有無を表示）

	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度
留学経験者	0 名	1 名	1 名	5 名	0 名
留学未経験者	0 名	0 名	2 名	1 名	8 名

要するに、2021 年度の 5 級合格者の 8 名は留学経験が全くないのである。一方で、2018 年度から 2020 年度においては、5 級の合格者は合計 10 名いるが、その内、7 名が 3 ヶ月あるいは 5 ヶ月の留学を経験している。留学先は安徽省黄山市にある黄山学院である。2018 年度から 2020 年度の間で留学を一切せずに 5 級を取得した学生は僅か 3 名である。従って、2021 年度以前の HSK5 級の合格者は、留学をきっかけに中国語能力を大きく向上させ、HSK5 級の合格へと至った可能性が高いと推察できる⁴⁾。

そこで、再度 2021 年度のデータに留意されたい。既述の如く、8 名の HSK5 級合格者全員が留学未経験である。しかも本稿の冒頭で述べたように、コロナウィルスの影響により、対面授業が制限される時期もあった。更に、コロナウィルスによって、留学に行けず、かつ、中国に関する様々なイベント（スピーチ大会や交流事業）の実施にも制限が生じたため、中国語の学習意欲を維持することは決して容易ではなかったはずである。このような状況下にも関わらず、驚くべきことに、本学の中国語教育史上最高の記録が出たのである。

さて、次は、2020 年度の入学生が 1 年次に受験した HSK3 級の結果について述べることにしたい。これにより、WeChat による教育効果の妥当性がより高まることとなる。

3.2 HSK3級の受験結果

2020年度に筆者の中国語を履修していた学生（1年生）は15名いたが、その中の13名がHSK3級を受験し、11名が合格した。2020年度は4月から6月まではずっとオンライン授業を行ない、かつ、国内インターンシップに参加する関係により、全員が11月末までに3級を受験したため、とても優秀であると言える。HSKの公式ホームページによると、3級は「大学の第二外国語における第二年度前期履修程度の学習が目安」と記されている。即ち、一般的には1年半の学習を要するのである。それ故、11名の合格者が出たことは特筆に値する。しかも、3級に合格した11名中7名は短大に入学してから中国語を学び始めた。つまり、この7名は4月から初めて中国語を学び、僅か8ヶ月程の学習で3級を取得したのである。そのため、WeChatによる指導が1年生に対しても効果的であったと考えられる。

更に、2021年度に入学した学生も良い成績を取っており、この結果も本稿で主張したいWeChat教育の有用性を支持すると見なしえる。要するに、2021年度の1年生は9名の学生が筆者の中国語を履修したが、その内、7名がHSK3級を受験し、見事に全員合格した。しかも、前年度と同様に、1年生の11月末からは国内インターンシップがあるため、7名全員が11月末に3級に挑戦したのである。注目すべき点としては、この2021年度は前年度の2020年度よりも良い結果となったことである。それは即ち、

- (10) ①合格者7名中6名が高等学校で中国語の学習歴がない学生である
②不合格者が一人も出ずに、受験者全員が合格した

である。そのため、WeChatの教育方法は前年度に続き2021年度の1年生に対しても効果的であったと理解できる。

最後に、地域活動の成果について述べることにしたい。これも2020年度と2021年度の大きな成果であると思見なしえる。

3.3 地域活動の成果

以上、HSKの成果について述べたが、2020年と2021年においては学生の中国語レベルおよび学習意欲がとても高いこともあり、動画作成を通じて地域活動を行うことができた。このような動画による大きな成果は2020年度以前に得ることができなかつたため、やはり、上述したWeChat教育が大きく影響していると推察できる。以下、この二つの動画作成について説明する。

まず、2020年に佐世保市役所の依頼を受けて、佐世保PR動画の作成に関わった。筆者の中国語の授業を履修した2名の学生が出演した。当動画を作成するにあたり、筆者は台本の作成、出演者に対する中国語の指導、字幕作成のサポートなどを行なった。当動画は佐世保市役所に提出後、旅行会社、クルーズ船、YouTubeおよび長崎短期大学のホームページ等で公開され、地域の活性化への貢献および本学のアピールに繋がった。学生にとっては中国語力を高める絶好の機会となった。特筆すべき点は、提出期限が迫っていたこともあり、撮影時は台本を準備せず、撮影直前に大まかなセリフを確認し、どんどん撮影を進めていったことである。つまり、学生は即興的に中国語を話すことが多かったが、しっかりと対応することができたのである。このような高い中国語力が発揮できたのは正に普段のWeChatによる発音練習等がいかにされている、と考えることができる⁵⁾。

いまひとつは、中国の食に関する動画（中国美食大会）を学生と作成し、中国の外文部が主催した「中国国際短編動画大会」（第三只眼看中国）に作品を提出し参加した。これは2021年における成果である。独特な匂いを放つタニシ麵（螺蛳粉）を大会形式で試食する内容となっている。これによって、学校のPRや地域の活性化を図った。筆者は台本を作成し、その後、学生に対して中国語や演技の指導を行なった。これを通じて、学生の中国語力が大幅に向上した。また、当動画は一部の学生は中国の伝統衣装を着て撮影したため、中国文化に触れる良い機会にもなった。この動画も提出期限が近づいていたため、リハーサルはほとんど行わずに撮影し、中国語のレベルに差がある学生も混ざっての撮影だったが、良い動画を作ることができたと感じている^{6) 7)}。その際に役立ったのが正に既述したWeChatでの発音指導である。時間は極めて限られていたが、学生は台本の

中国語を何度も練習し、その音声を WeChat で筆者に提出し、筆者はそれに対して繰り返し指導を行なったのである。

なお、コロナウィルスの影響により、動画作成時は終始様々な制限があったが、作成に加わったメンバーは WeChat を通じてスムーズに連絡を取り合い、事前準備や動画撮影後に行なった動画編集において、効率よく作業を進めることができた。

総務省統計局のデータを見ると、長崎県の人口増減率は - 4.7% (平成 27 年～令和 2 年) ということが分かる。長崎周辺の県に注目してみると、福岡県は + 0.7%、佐賀県は - 2.6%、熊本県は - 2.7%、大分県は - 3.6%、宮崎県は - 3.1、鹿児島県は - 3.6、沖縄県は + 2.4 である。これらは長崎県と同様に平成 27 年から令和 2 年までのデータである。つまり、この中では長崎は最も人口が減少している。ちなみに当データにおいて最も増加率の高い都道府県は東京都 (+ 3.9%) で、減少率が最も著しいのは秋田県 (- 6.2%) である。それ故、全国的に見ても、長崎県の人口減少率 (- 4.7%) はとても高い。当然、これに関しては様々な観点からの分析が可能のため、断定し難いものの、減少率が上がることにより、少子高齢化や経済衰退等の問題が深刻となる可能性があると言える。そのため、微力ではあるものの、このような地域に関連した動画の作成、或いは、学生の学習成果を元気に披露する動画の作成はとても意義のある活動であると考えている。

従って、筆者は、WeChat を活用した中国語教育は学生の中国語能力の向上に効果があり、かつ、地域貢献へも繋がることを主張したい。そのための重要な証拠として、今回、HSK といった客観的な試験および動画作成によって可視化でき、かつ、HSK に至ってはその成果が 2020 年度の 1 年生、2021 年度の 1 年生、そして 2021 年度の 2 年生の 3 学年において例外なく看取できたため、本稿の主張は一定の説得力を有していると思える。

4. 結びにかえて

前節で述べた 2021 年度の HSK5 級の合格者は、8 名中 4 名が本学卒業後に上海師範大学の本科 (対外漢語学院) に 3 年次編入したため、学生達の今後の更なる活躍が期待できる。また、この 4 名以外の学生もそれぞれの進路を着実に歩み出したので、今後が極めて楽しみである。学生達はコロナウィルスのため、この 2 年間、本当に様々な制限を受けながら学生生活を送った。将来の予測がつかず、言葉では形容しがたい不安を抱えながら懸命に学びを継続した学生も少なくないであろう。だが、学生達の HSK5 級の合格を次々と目にした時、そして、学生達の活躍が輝くあの二つの動画を目にした時、筆者は一種のコロナウィルスに打ち勝ったかのような感覚を強く覚えた。学生達の情熱ある学びと筆者の中国語教育や地域活動に対する思いは、様々な困難をも乗り越えられるのだ、といった希望や自信を持つに至ったのである。今後の課題としては、やはり如何にしてこの WeChat による教育方法の妥当性を更に高めるか、という点が挙げられる。従って、次年度も引き続き WeChat による指導を実践し、学生の中国語力の向上および地域に少しでも貢献できるよう全力で取り組みたい。

注釈

- 1) 本稿のテーマは本学国際コミュニケーションコースのコース長である牟田美信教授のご助言によって多くのヒントを得た。この場をお借りして感謝の意を表したい。
- 2) 指定した一定量の中国語の文を音読し、その音声を提出すれば、単位を与える授業も設置しているが、対面形式ではないため、上の表には加えていない。
- 3) 章潔 2018 の報告によると、2017 年度においては 5 級の合格者は出ていないことが分かる。
- 4) この 10 名の学生の内、僅か 2 名のみが高等学校で中国語の学習歴を持つ学生である。従って、高等学校で中国語の学習歴がなく、本学に入学してから学んだとしても、十分に実力が身につくとと言える。
- 5) 動画の URL は以下の通りである。

<https://www.youtube.com/watch?v=CneA2srynHc>

6) 動画の URL は以下の通りである。

https://www.bilibili.com/video/BV1VX4y1P7ux?from=search&seid=2105448082719544575&spm_id_from=333.337.0.0

7) これらの動画は、本学の講師（「Awesome Sasebo!」の科目を担当）である福原功太郎先生が中心となって撮影と編集が行われた。福原先生に感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) 青木萌 (2019) 「国際コミュニケーション学科・中国語教育への新たなチャレンジ—より効果的な中国語教育の取組みと新たな中国留学システムの確立—」『長崎短期大学研究紀要』第31号,97-101頁.
- 2) 青木萌,張逸芝 (2020) 「国際コミュニケーション学科中国語教育への新たなチャレンジ (2)」『長崎短期大学研究紀要』第32号,57-65頁.
- 3) 植松容子 (2020) 「WeChat を用いた合同授業型遠隔授業：—日本語文法を題材として—」『日本語教育方法研究会誌』第26巻第2号,14-15頁.
- 4) 謝金良 (2021) 「WeChat の科目グループを利用して古典文献を教える経験と方法 (神戸・復旦・北京三大学オンラインフォーラム「疫病流行期のオンライン人文教育: 挑戦、課題と可能性」報告要旨)」『海港都市研究』第16号,89-94頁.
- 5) 章潔 (2018) 「長崎短期大学生の HSK 受験結果報告と分析」『長崎短期大学研究紀要』第30号,109-116頁.
- 6) 譚笑 (2017) 「中国の大学における WeChat を活用した交替反応時間の長い環境での発話活動—3、4年生の日本語学習者を対象として—」『日本語研究』第37号,6-30頁.
- 7) 劉琳 (2021) 「ウィーチャットを活用する日本語読解授業の実践」『日本語教育方法研究会誌』第28巻第1号,84-85頁.
- 8) Xiaoqin Huang (2019) WeChat-based teaching for an immersion cultural exchange program - a case study in CFL (<https://slejournal.springeropen.com/articles/10.1186/s40561-019-0087-0>) (2022年3月28日閲覧).
- 9) 総務省統計局ホームページ (URL:<https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.stat.go.jp%2Fdata%2Fnihon%2Fzuhyou%2Fn220200200.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK>) (2022年3月31日閲覧).
- 10) HSK ホームページ (<https://www.hskj.jp/>) (2022年3月31日閲覧).